

第IV章 考 察

第1節 上前原遺跡出土加曾利E式土器の編年の位置付け

はじめに 加曾利E式土器は、改めて指摘するまでも無く、大正13年に山内清男氏が、八幡一郎氏・甲野勇氏らとともに発掘調査を行った、千葉県加曾利貝塚E地点出土の土器をもって型式設定した、中期後半に属する型式名である。その辺の事情については、柳澤清一氏に詳しい（柳澤：1985・1986）。

研究の現状 しかし、当初より縄文時代中期後半の土器型式は、その細別内容の認識が混乱しており、そのことは既に1970年代に、堀越正行氏により指摘されていた（堀越：1972）。にもかかわらず、現在に至るまで未だに、研究者間によって、その型式観は一致を見ていないのが現状である。

しかし、細別呼称こそ異なるものの、各編年案の大枠は多少の齟齬はみられるものの、ある程度対比が可能な状態であることも事実で、「縄文時代研究者にとって、加曾利E式は一般教養」との見方もなされているのも、また実情である。

型式設定後、細別研究上最大の画期は、1978・1980年に神奈川考古同人会によるシンポジウム（神奈川考古同人会：1978・1980）であり、そして、1981年に行われた日本考古学協会によるシンポジウム（小林他：1981）、1995年縄文中期集落研究グループによるシンポジウム（縄文中期集落研究グループ他：1995）等へと続く、一連のシンポジウム・セミナー系編年案の提示である。蓄積された膨大な広域の該期資料群は、もはや個人での資料収集レベルをはるかに超えている現状がある。

埼玉県の実況 一方、埼玉県では独自の研究が進められている。1970年に『膳棚』遺跡の報告書が刊行され（岩井他：1970）、この報文中において、加曾利E式の細別呼称にローマ数字が使用されたことから、現在に至るまで、埼玉県において使用される該期の細別名称は、ローマ数字が主流となっている。

1982年には、埼玉県埋蔵文化財調査事業団による編年案の提示（谷井他：1982）があり、その後の県内における該期編年の基本となっている。

1990年代に入ると、加曾利E終末期のあり方について、後期の称名寺式との関係から、積極的な見直しが始まり、独自の編年案が提示されている。橋本勉・細田勝・谷井彪氏らによる一連の研究である（橋本：1991、橋本：1994、細田：1994、谷井・細田1995、金子：1997、谷井・細田：1997、上野：1999、上野：2000、谷井：2003、細田：2003、橋本：2004）。もっとも、これら一連の研究は、事業団統一編年というわけではなく、当初示された編年案に、各々修正が加えられ、各研究者間での認識の齟齬が徐々に明らかになっており、その様相は一段と複雑さを増してきている。

本稿では、そういった混乱を認識しつつも、現状でそれを解消するだけの力量を持ち合わせていないため、基礎資料の提示として、近隣遺跡との比較検討を行い、地域的に

限定される江南台地上における加曾利E式後半の様相を概観し、本遺跡出土土器の位置付けを試みるものとする。ちなみに本稿では、加曾利E式の細別呼称にアラビア数字を用いる^(註1)。

江南台地上の
大規模集落

江南台地上における中期の拠点的な集落跡は、荒川上流より、寄居町南大塚遺跡（第34図1；寄居町遺跡調査会：2001）、東国寺東・増善寺遺跡（第34図2；寄居町教育委員会：1982・1993・1995）・むじな塚遺跡（第34図3；寄居町遺跡調査会：1998）・露梨子遺跡（第34図4；寄居町教育委員会：1997・2002、寄居町遺跡調査会：1997）、牛無具利遺跡（第34図5）・深谷市上本田遺跡（第34図6；川本町遺跡調査会：2000）・江南町西原遺跡（第34図7；江南町千代遺跡群発掘調査会：1996）・上前原遺跡（第34図8）と、2～4 km間隔で中～大規模な集落跡が存在することが、近年の調査で明らかになってきている。いずれの遺跡も、荒川沖積地を望む江南台地縁辺部（正確には、台地上を開析する小河川に面した、小支台毎の台地縁辺部からやや奥まった地点）に位置しており、後背地に丘陵や山地が控えていることで共通する立地条件をもっており、遺跡相互の関係が注目されるところである。

中でも集落規模がある程度確認できる調査が行われた遺跡として、上本田遺跡と西原遺跡が挙げられる。上本田遺跡は、勝坂3式期から加曾利E3式期にかけて営まれた環状集落であることが確認されている。住居数70軒以上を数え、本地域における拠点的な集落跡であることが確認されている。一方、西原遺跡は、上本田遺跡の下流約2.5kmの地点に位置し、上本田遺跡が急速にその集落規模を縮小する、加曾利E3式期に突然現れ、加曾利E4式期までの短期間に、50軒以上の住居が集中的に営まれた集落跡であることが確認されており、その補完的な関係が興味深い。

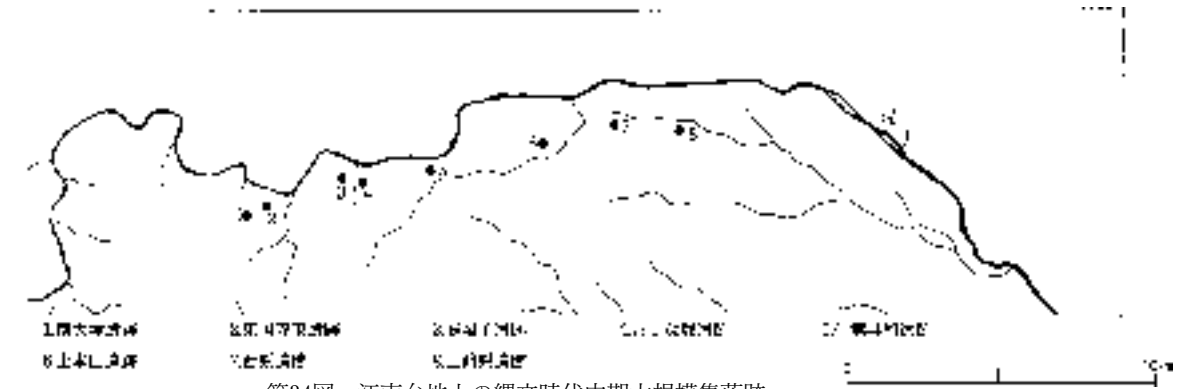
今回、本遺跡で確認された住居跡は、加曾利E式後半に属するものであることから、距離的にも約2.2kmと近い、西原遺跡の出土遺物との比較検討をおこなってみたい。

西原遺跡

第35・36図に、本地域における加曾利E式期後半の様相を良く現していると考えられる、西原遺跡の13軒の住居跡出土土器を挙げて検討してみたい。

加曾利E3式

1～31は、加曾利E3式期の範囲に納まる土器群である。
1～3は、第3号住居跡。1は、炉体土器。頸部に円形竹管による刺突を加えた隆帯を貼付している曾利系の土器。小形化しているが、いわゆる重弧文タイプの終末段階のものである。2は、炉脇の床面直上から出土した連弧文土器。3は埋甕で、胴部に磨消



第34図 江南台地上の縄文時代中期大規模集落跡

の懸垂文が認められる加曾利E式土器である。曾利系の土器・連弧文土器・キャリパー形を呈し口縁部文様帯をもつ典型的な加曾利E3式の共伴事例である。

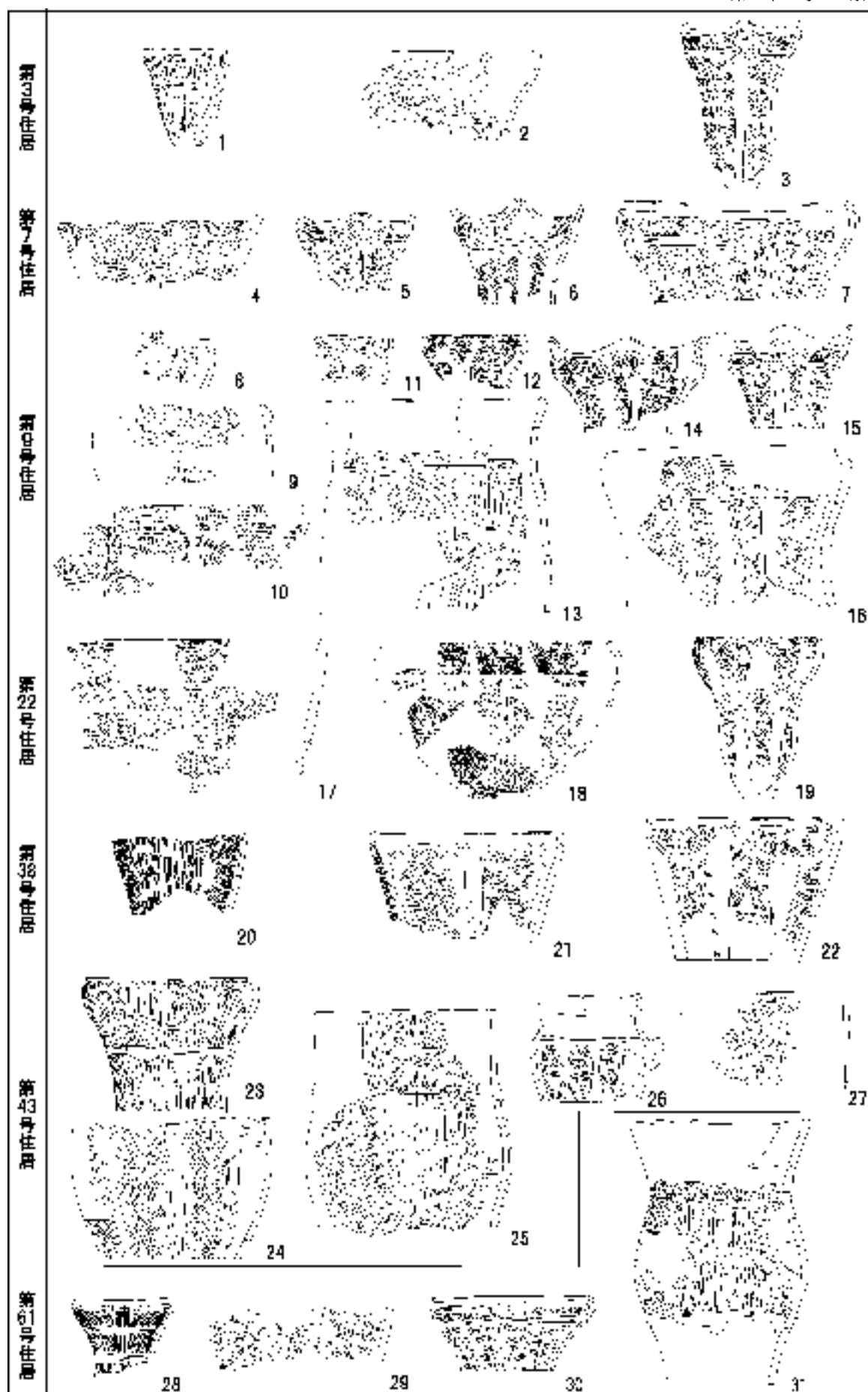
4～7は、第7号住居跡。7が炉体土器で、4～6は覆土。4は口縁部と胴部下半を接合帯でカットされており、被熱も認められることから、他の住居で炉体土器として使用されていたものが、5・6と共に本住居の廃絶後に廃棄されたものと推測される。したがって、7→4・5・6へと時間差がある。7は平縁で、口縁部が円文と楕円文によって構成される。5・6は、波状口縁を呈し、波頂部下に連結する渦巻文を配しており、楕円区画文も2単位が沈線で連結している。5の胴部には、2条の沈線懸垂文間に楕円区画が縦位に施文されており、大木9式の影響が認められる。5～7は、加曾利E3式に属するが、層位的にも文様の上からも、5・6の土器が新しい様相を示している。4は、キャリパー形を呈するものと推測され、胴部に隆帯の貼付による大型の渦巻文を施文している。いわゆる梶山タイプ^(註2)の土器と、口縁部文様帯をもつ加曾利E3式土器の共伴事例である。

8～16は、第9号住居跡。15は埋甕、その他は覆土中よりの出土である。15は、波状口縁・キャリパー形を呈し、口縁部には隆帯で渦巻文と楕円文を配している。胴部には、縄文施文部に蕨手状の蛇行沈線が垂下している。これに対し覆土中より出土した同タイプの14は、口縁部の円文と楕円文が連結しており、胴部の磨消懸垂文の幅も広く不規則にとられている。16は平縁であるが、口縁部の楕円文はかなり崩れたモチーフとなっている。11も同様に、口縁部文様の沈線がかなり崩れている。8・9は大木系の土器。球胴状に膨らむ胴部破片。8は沈線で、9は平らな隆帯で渦巻文を描出している、大木9式である。10は見慣れない土器である。楕円状の沈線モチーフの中に雨垂状の列点を充填している。12は、吉井城山タイプ^(註3)。口縁部の弧状沈線間に、下からの懸垂文が貫入し、弧状のモチーフが単位化し、「Y」字状の磨消懸垂文化している。13は、胴部隆帯文系とされる将監塚タイプ^(註4)の土器。大木9式・吉井城山タイプ・将監塚タイプ・口縁部文様帯をもつ加曾利E3式土器の共伴事例である。

17～19は、第22号住居跡。17は、曾利系の土器。胴部には、刻みの加えられた垂下する隆帯区画内に、篋描き沈線による綾杉文が充填されるのが特徴で、千曲川中上流域に分布する仮称郷土式^(註5)とされるタイプの土器の影響が認められる。18は、鉢形土器。加曾利E系か。19は埋甕で、キャリパー形を呈する、吉井城山タイプの土器。胴部の逆「U」字状の懸垂文は、口縁部の波状沈線間には貫入していない。曾利系（郷土式）と加曾利E系の鉢、吉井城山タイプの共伴事例である。

20～22は、第38号住居跡。20が炉体土器で、21が伏甕、22が埋甕である。20は口縁部と胴部下半を欠損する。櫛歯状工具による縦位の条線が施文されている。曾利系の土器。21は、口縁部文様帯を欠く、一段懸垂文タイプの土器。22は、口縁部に太い沈線で楕円文が施文されている。口縁部文様帯を持つタイプと持たないタイプの加曾利E式土器と、曾利系の土器の共伴事例である。

23～27は、第43号住居跡。23は埋甕。24～26は炉体土器。23は、口縁部には2条の波状沈線が巡り、沈線間は地文の条線は磨り消されている。頸部には2条沈線が施文され、



第35图 西原遺跡出土土器(1)

胴部には逆「U」字状の沈線が垂下する。キャリパー形を呈し、連弧文土器と吉井城山タイプの折衷的な土器である。24は、逆「U」字状を呈する懸垂区画の中に綾杉状沈線を充填している。17の土器と同様に、千曲川中上流域に分布する郷土式とされるタイプの土器の影響が認められる。25は、曾利系の重弧文土器の最終段階の土器。26は、加曾利E3式の両耳壺。連弧文土器（吉井城山タイプ）・曾利系土器（郷土・重弧文）・加曾利E3式土器の共伴事例である。

28～31は第61号住居跡。28は埋甕。31は炉脇の床面から出土。30は接合帯できれいにカットされており、転用品の可能性もある。28は、連弧モチーフは施文されていないものの、明らかに連弧文土器である。29は、垂下する沈線間に矢羽根状沈線を充填している。東京西部から神奈川にかけて分布する、曾利式と加曾利E式の折衷タイプ^(註6)とされる土器である。30は、口縁部文様帯を持つ、キャリパー形を呈する加曾利E3式土器。31は、将監塚タイプの土器。連弧文土器と将監塚タイプの土器は共伴し、加曾利E式と曾利式の折衷土器と加曾利E3式土器は時間差が考えられる。

加曾利E4式

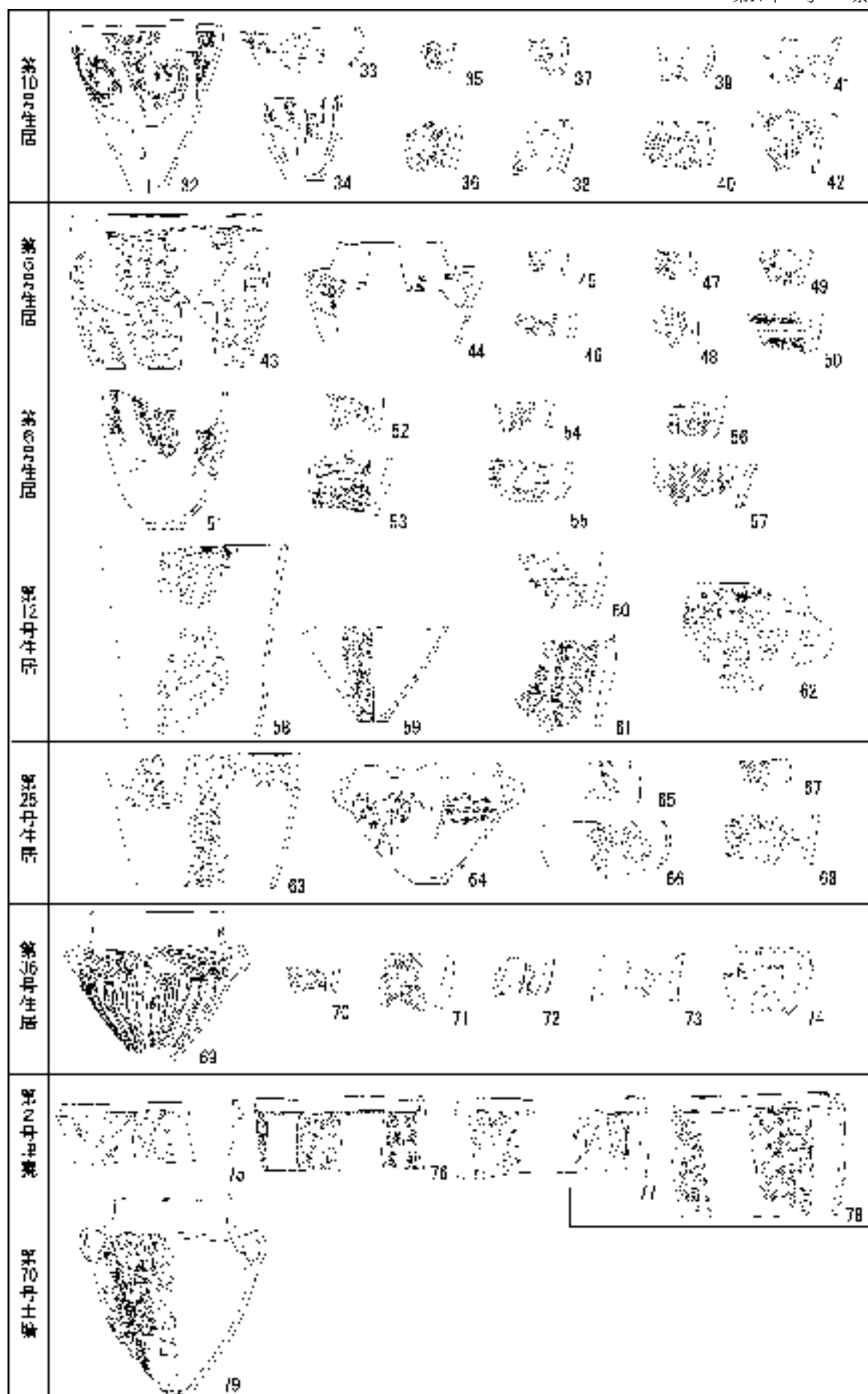
32～79は、加曾利E4式期の範囲に納まる土器群である。

32～42は、第10号住居跡。報告書刊行時点では、32の炉体土器から加曾利E4式期直前と判断したが、加曾利E4式期と訂正したい。32は、口縁部上端に沈線で区画した幅狭い無文帯をもち、胴部上半に沈線で渦巻き状の「J」字文を5単位施文している。胴部下半は無文となる。底部からほぼ直線的に広がり、口縁部がやや内湾する。底部が小型化していることが特徴である。キャリパー形を呈し、胴部上半に「J」字文・胴部下半に逆「U」字状の沈線を施文する例は本期に見られるが、器形・文様構成ともあまり類例の少ない土器である。類例として、宮城県長根貝塚第1号住居跡出土遺物が挙げられる(第37図1、宮城県教育委員会：1969)。大木10式に比定されるもので、口縁部下に1条の沈線を巡らせ、地文の縄文をネガ・ポジ反転させると、まさに第36図32の土器になる。大木式土器の影響下で、口縁部無文帯を設け、ネガ・ポジ反転して在地化した土器と理解される。

33は、内湾する波状口縁が無文帯となり、波頂部に合わせるように胴部に大振りの渦巻き沈線が施文されている。36も同様の文様構成をとるものと思われる。38は、断面三角形の隆帯を短冊状に貼付している。41は波頂部下に渦巻文が施文されている。42は上下逆か。胴部上半の波状沈線間に、胴部下半から鋭角な逆「U」字状懸垂文が施文されている。

43～50は、第5号住居跡。43は床面直上から出土している他は、覆土中よりの出土である。43は、断面三角形の隆帯を短冊形に貼付している。西関東地方に主体的に分布する典型的な加曾利E4式土器である。44は両耳壺。45～50は破片資料で、全体の文様モチーフがはっきりしない。45・46は吉井城山タイプの可能性がある。50は、微隆起状の隆帯が、口縁部に幅狭い無文帯をとり、タガ状に貼付されている。

51～57は、第6号住居跡。51は埋甕で、他の破片は覆土中より出土している。51のモチーフは不明であるが、断面三角形の隆帯区画に、縄文を施文している。52は、沈線で抱球状のモチーフをとるものと推測される。53は、波状口縁を呈している。口縁部に幅



第36図 西原遺跡出土土器(2)

狭い無文帯をとり、微隆起伏の隆帯を2条タガ状に巡らせ、磨消帯を伴う沈線を垂下させている。54は、吉井城山タイプと推測される。55は、弧状に垂下する隆帯が、口縁部をタガ状に巡る隆帯に貫入している。56・57は微隆起伏隆帯が短冊状に貼り付けられている。

58～62は、第12号住居跡。59は埋甕、その他の破片は覆土中の出土である。58は、タガ状に巡る沈線で区画された幅狭い口縁部無文帯をとり、以下胴部は縄文のみ施文される。胴部下半では縄文が羽状施文されている。60は、微隆起伏の隆帯が、口縁部に幅狭い無文帯をとり、タガ状に貼付されている。61は、文様モチーフは不明であるが、沈線間の縄文地文が磨消されている。62は、両耳壺。把手の両脇に、微隆起伏の隆帯が円く貼付されている。

63～68は第25号住居跡。64の両耳壺は埋甕。他の破片は、覆土中よりの出土である。63は、口縁部下に幅狭い無文帯をとり、断面三角形の微隆起伏の隆帯をタガ状に貼付している。胴部には横位の縄文が施文されている。68は、断面三角形の微隆起伏が垂下している。短冊状のモチーフをとるものと推定される。66は、内彎する口縁部に1条の沈線を巡らせ、幅狭い無文帯とし、沈線間を磨り消した逆「U」字状のモチーフを施文している。口縁部の無文帯が突起する箇所に対応して、逆「U」字状の頂点が接している。

69～74は、第36号住居跡。報告書では、69の両耳壺の埋甕から加曾利E3式と判断したが、E4式と訂正。肩部に巻ききらない円文と楕円文を配す。胴部以下は櫛歯状工具による波状沈線が施文されている。70・71は波状の沈線が施文されるが、全体のモチーフは不明。72～74は断面三角形の微隆起伏を貼付し、隆帯間の地文の縄文を磨消している。梶山タイプの土器。

75～78は第2号埋甕。4個体分の破片を重ねて埋甕としたもの。いわゆる岩坪タイプ^(註7)に近い平縁の75と、短冊状懸垂文タイプの共伴事例である。76の隆帯上にも縄文が施文されている。

79は、土壌に埋設されていた両耳壺。肩部に巡る隆帯上にも縄文が施文されており、肩部以下が長胴化している。

加曾利E3式期の様相

西原遺跡にける加曾利E3式期の様相は、加曾利E式系の土器（口縁部文様帯を持ちキャリパー形を呈する典型タイプ・口縁部文様帯を切断したタイプ・吉井城山タイプ・梶山タイプ・将監塚タイプ）に他型式として連弧文土器・曾利系の土器（重弧文タイプ・郷土式類似タイプ）・大木系の土器が伴出し、地文・文様構成に曾利・大木式の影響を認めることができる。

加曾利E4式期

これに対し、加曾利E4式期は、E3式期の様相と比較すると、まず、僅かに文様構成・施文法に大木系・曾利系土器の影響が認められるものの、伴出遺物として他系統の土器型式が認められない事が指摘できる。連弧文土器はこの段階には消滅し、加曾利E式土器においても、口縁部文様帯をもつタイプの土器は出土していない。口縁部に、幅狭い無文帯をもつ加曾利E式系の土器が大勢を占めている。短冊形の懸垂文モチーフをもつものが多く、吉井城山タイプ・梶山タイプの土器・「J」字または渦巻きモチーフの土器・両耳壺等が出土している。

また、本段階においては、未だ後期称名寺式土器の伴出を見ない。したがって、当然本段階は中期最終末の土器群（加曾利E 4 式）であると認識される。山内清男氏が指摘した、「最も新しい部分」の加曾利E 式である（山内：1940）。現在の埼玉県の仕事団編年では、加曾利E III 式期に比定されるのであろうか。

そして本段階には、いわゆる「西日本系の中期末葉土器群」（柳澤：1999a.b）の伴出も確認されないことから、加曾利E 4 式期でも前半段階に属することが指摘される。

上前原遺跡

以上が西原遺跡における加曾利E 3 ～ 4 式期の様相である。では次に本遺跡の第 2 ・ 3 号住居跡出土遺物を検討してみたい。

第 2 号住居跡出土遺物は、炉体土器（第10図 1）と覆土に廃棄された土器で構成される。炉体土器は口縁部を欠くが、胴部上半に渦巻文を 5 単位施文し、胴部下半は無文となっている。破片資料であるが、西原遺跡第12号住居跡（61）の土器や、キャリパー形を呈するが西原遺跡第10号住居跡（33）に類似する資料である。器形・文様構成は、西原遺跡第10号住居跡（32）に類似している。本資料や西原遺跡第10号住居跡例（32）の、底部から直線的に広がり、口縁部がやや内彎する器形は、西原遺跡第25号住居跡（63）の土器の器形に類似するが、この時期の加曾利E 式土器には一般的ではない。類例では、埼玉県名細下小坂遺跡出土土器（第37図 2）、千葉県西広貝塚（第37図 4 ・ 5、市原市教育委員会：1977）、栃木県槻沢遺跡 SI11（第37図 3、栃木県教育委員会：1996）等で出土している。大木式のアルファベット文が在地化したものと推測される。槻沢遺跡例は加曾利E 4 式＝大木10式期に比定されており、本例も該期に比定されるものと考ええる。また、覆土中からも、他型式の伴出は確認されないことから、覆土中の遺物に関しても加曾利E 4 式期に比定されるものと考えられる。

第 3 号住居跡出土遺物は、大木 9 式の可能性のある床面直上の土器（第16図64）と覆土に廃棄された土器で構成される。覆土中の土器は、口縁部下に細い棒状工具による刺突列を加えるタイプ（第12図 1 ～ 4、第14図44）・梶山タイプの土器（第13図36～43・第14図46）・岩坪タイプの土器（第13図35・49）・両耳壺（第14図45・47・55）・吉井城山タイプの土器（第12図15・20・23、第13図28、第15図51～53・58）・鉢形土器（第14図48・第15図60）・隆帯で短冊形の懸垂文を施文するタイプ（第15図57・59、第16図65）である。他型式の伴出は認められない。床面直上の土器は加曾利E 3 式＝大木 9 式期、覆土中の遺物は加曾利E 4 式期に比定される。

今後の課題

以上が、本遺跡・西原遺跡における加曾利E 式期後半の様相である。本稿では触れないが、江南台地上の他の集落遺跡（第34図）においても、概ねこれらの様相は一致した傾向として把握される。この非常に限られた地域に限定される土器群の様相が、どこまで広域的に敷衍できるものか現在のところ明確にできていない。逆に異なる様相が現れる地域を確認できれば本地域における特徴としてのまとまりを認めることが可能となるはずである。

現在の埼玉県における加曾利E 式後半の編年は、他地域に比べて混乱の度合いが大きい。このような状況の中では、ある限定された地域における様相の見極めによる基本的な事例の積み重ねと、各地域間における比較検討が必要であると思われる。

また、該期の型式細分を究極まで進めている柳沢清一氏の提唱する、加曾利E 3—4式（中間式）に関する一連の研究（柳沢：1991・1992・1997・1999a.b）も避けて通れない問題である。

今後、江南台地上に分布する大規模集落間の関係、土器の様相を比較検討し、江南台地という狭いながらも地理的に共通する立地条件で成立した集落間の土器群の様相を検討し、北関東における諸地域の土器群との比較を進めて行きたいと考える。

- 注1 山内清男氏設定の加曾利E式土器の細別呼称に拠る。
- 注2 梶山タイプ—胴部に隆帯による大柄な渦巻き文が描かれるもの。梶山遺跡で初めて注目された土器（神沢：1970）で、大木式の影響下で成立。主体となる時期は加曾利E 3～4式期とされる（谷井：2003）。
- 注3 吉井城山タイプ—胴部上半に波状沈線、胴部下半に逆「U」字状懸垂文を施文する土器。胴部中に括れ部がくる器形を呈する。吉井城山貝塚で初めて注目された土器（岡本：1963）。主体となる時期は、加曾利E 3式期。
- 注4 将監塚タイプ—埼玉県本庄市（旧児玉町）将監塚・古井戸遺跡（財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団：1986、1989）で初めて注目された土器。幅広無文口縁部をもち、胴部に大振りの渦巻き隆帯を貼付する土器。埼玉県北部から群馬県南部をへて千曲川水系にかけて分布する。主体となる時期は加曾利E 3式期。
- 注5 仮称郷土式—佐久地方を主体に分布する、唐草文と加曾利E式土器の折衷タイプとされる（桜井：2000、綿田：2003）。鱗状単沈線を最大のメルクマールとする。一型式として成立するかは、今後の研究課題。主体となる時期は、加曾利E 3～4式期。
- 注6 折衷土器—加曾利E式の文様構成に曾利式の地文（櫛歯状工具による条線・矢羽根状沈線）をもつタイプの土器。主体となる時期は加曾利E 3式期。東京都西部から神奈川県にかけての両型式の分布が重なる地域での出土が確認されている。
- 注7 岩坪タイプ—茨城県岩坪貝塚出土例（杉山：1965）を典型とする。口縁部無文帯に貫入するように逆「U」字状磨消懸垂文が施文される。吉井城山タイプからの変遷が想定される。主体となる時期は加曾利E 4式期。



第37図 参考資料